

会員だより

大友氏のことども

麻 生 英 臣

(会員・東京世田谷)

佐伯史談会の年毎の熱心な御活躍ぶりにただただ頭が下ります。永らくの羽柴先生の汗のじみを感じさせて下さった例のガリ版刷の方が、はるかに値打ちのあったことが、今にして痛感されますが、かように会員が増し、写真をのせる表現となりますと、どうしても今のようない印刷方式にならざるを得ず、これはこれなりに大変よくできており、佐伯の誇れる文化活動をそこに認めます。

ここ東京にも色々な方が佐伯史談会のことを知っており、これ程までの出来栄えの月刊紙としての史談誌は、全国的にも非常に珍らしく、編集者の方々に心よりお祝いの意を表します。

またさすがは歴史の古い佐伯に住む会員の皆様のお一人お一人が、大変な博識で巾広い多技多能者でおられ、佐伯の歴史的特性を文化保存の意識にたって、連綿と受

け継いでいられることに驚きます。大分県下にはとても右に出る史談誌はなく、今後とも今の調子でよろしく継続されて下さいますように。……中略……

今日はちょっと珍らしい話を伝えさせていただきます。一九八〇年の夏、私の母麻生ソヨ（佐伯市駅前在住）が上京しました折、その一年前より懇意な関係にありました大友義介氏（横浜市磯子区在住、大友家第三十六代のお殿様、東京大学経済学部卒、永らく三菱銀行に勤務、現在立正大学商学部教授）が、わざわざ世田谷の私の家に母を訪ねて下さいまして、大友宗麟公の話、津久見の話、先年佐伯の長谷の天徳寺にある宗麟説の墓を訪れた話などいろいろ致しました。

私達の先祖は過古数百年間疋田姓の名のもとに、津久見の引地に住み、宗麟墓地をずっとお守りして来たので



麻生ソヨさんと大友義介氏

新までは徳川家により、この大友一族は江戸千代田城内にてパトロナイズされていただけに、この義介氏の口もなど公家特有の上品なおちよぼ口をしていたり、はだが大変こまやかで且つ音声など実に

はないかという説があり、今なお母が宗麟公の霊を丁重にお祭り続けていることに對するお礼の目的で来て下さったものです。……中略……

ここにその折りの写真がありますので参考までに同封致します。大友宗麟公がどんな顔だちをしていたかわかりませんが、この小柄な三十六代目のお殿様に、ある面影の一片かをさぐり出せるような気が致します。明治維

優雅なものになっていることがわかります。

かつてこの義介氏のことには、『佐伯史談』で記事として取り上げたことはなかったと思いますが、会員の皆さんに本人がどんな顔つきの人か、この機に知っていただくことの意味から、私の撮った写真を同封します故、よければ会誌に使ってみて下さい。

なお義介氏ももう七十代の後半になりつつあります。実は横浜の大友家には未公開の古文書がたくさん保存されたまま眠っており、これを今後どう保存したらよいものかと悩んでおられます。東京大学が是非東大に寄贈してほしいと申し入れて来ているようですが、私は宗麟公ゆかりの大分・臼杵・津久見・佐伯あたりに分散して保存することを考えてはと申しましたところ、一番よいのはその方法であるが、しっかりした保存施設がないと困ると心配しておられます。以下略……